



オアシス

文責：副学長
桑原雅次

出雲芸術アカデミーだより 2019年2月8日発行 第10号

2月は例年ですと冬将軍真っ盛りですが、今年はその兆しが見られないようです。昨年の大雪には往生しましたが、降らない年には春からの水不足が心配になります…。

1月末のテニス「全豪オープン」で“大坂なおみ”選手が見事『優勝!』。この話題は、TV視聴率が30%越えを見ても関心の高さがうかがえる出来事でした。一方で、暗いニュースもありました。児童虐待に関する情報を公開してしまった拳句、不幸が重なり当事者の児童が死亡する案件には、ひとりの大人として幼い命を守れなかったことに苛立ちを覚えました。多くの子どもたちを預かる本音楽院の立場として、改めて責任の重さを感じています。

明るいニュースもありました。2月1日付の新聞に本アカデミーに高1まで在籍していた、“田中志和”さんが、『第24回 KOBE 国際音楽コンクール』B部門（中学・高校生）で、弦楽器部門ヴァイオリンで【最優秀賞】を受賞されました。しかも、全部門（ピアノ・声楽・弦楽器・木管楽器・金管楽器・打楽器）の中から最高位の【兵庫県知事賞】受賞という快挙でした。本アカデミーから育った受講生たちが活躍していることに喜びを隠せません…。

◎ 「うたなかまコンサートと2019」の素晴らしさ!

うたなかまコンサートの様子

本アカデミー音楽院幼児科による発表会が「うらら館」で開催されました。恒例の親子による音楽劇には、父親あるいは母親がお子様と共に奮闘する姿がとても印象的でした。

お子様にとって、親が自分のために一生懸命に演じてくれている姿を見せることは、親子の絆をより深く結びつけることでしょう。

今年の音楽劇の題材は「ラララッツ」でした。この劇は、米山学長が自ら作詞・作曲を手掛けられたオリジナル作品です。久しぶりの上演となりましたが、歌や表現を通してステージいっぱい演じられ、とても見ごたえのあるものでした。この発表会は、普段の講座の中で講師の先生を中心に、リトミック等を通し、コツコツと積み重ねられた賜物と思います。その成果をホールで発表できることは、とても素晴らしいことで、聴く側はもちろんですが、演じる側にとっても最高の喜びとなり、忘れられない出来事として記憶に残ることでしょう。うたなかまコンサートの特徴は、本アカデミー講師陣による生演奏で構成されることです。他の発表会では真似のできないことであり、聴衆の皆さんは、出演者と演奏者の息がピッタリ合う臨場感あふれる演出に魅了されたことと思います。

「うたなかまコンサート」は、本アカデミー音楽院の総力を挙げての公演であり、音楽という素晴らしい体験は、子どもたちに心の栄養剤として注入され、今後の豊かな生活に



導かれるものと思じてやみません。幼児科修了後は、本科へ入校していただき、継続することでさらなるお子様の飛躍を期待するところです。

◎ AI 社会における音楽の役割！

今年の正月特集記事として、「AI やロボットに職は奪われるのか」と題した興味深い表が掲載されていました。我が国は少子高齢化が進み、特に製造業や介護の現場では人手不足が深刻化している様子がよく報道されています。そんな中、先ほどの表には、「代替されやすい職業」と「代替されにくい職業」がそれぞれ整理されていました。「代替されやすい職業」には、運転士や検針・検品係員の他、事務系の職業が多くありました。それに比べ「代替されにくい職業」には、医師、教員、はり師・きゅう師などが紹介されていました。記事の内容には、「力のいる仕事をロボットにやらせれば、高齢者たちも工場で働けるようになる。そして、国内に雇用の場を残せるはず」というAI・ロボットとの共存の在り方を解いたものでした。

ふと、思うに「音楽」はこれからのめまぐるしく変化する社会にあって、どのような位置づけになっていくのであろうかと少々不安になりました。そこで、あくまでも私見ですが、述べてみたいと思います。



中学校では、9教科(新学習指導要領では道徳も教科化)を中心に授業を進めますが、その中でもいわゆる5教科(国語・社会・数学・理科・英語)に割かれる時間が多く組まれています。残りの4教科(音楽・美術・体育・技術家庭)は、いたって少ない時間数で行われているのが現状です…。5教科にウエイトが置かれているのは、受験が影響しているものと思います。それぞれの専門的な分野に進めば大いに役立つことと誰しも思うところです。一方で4教科はどうでしょうか…。役立つ教科としては見離されてしまいそうです。しかし、よく考えてみると生涯にわたって大切なことがあります。

体育は何よりも健康に役立つものです。技術家庭は生活をするうえで最も身近な行為です。では、音楽や美術のような芸術はどうか…。それは心に栄養を補うことといえます。いつまでも健康で、節度ある生活が出来、心が晴々していれば人生がどんなにか楽しいことか…。「音楽」に対する一般的な評価でよく耳にすることは、「音楽なんかやっても食べられないだろ!」。確かに…。しかし、ここで引き下がるわけにはいきません。もし、音楽が世の中から消えたらどうなるか考えてみてください。映画やTVから音楽がなくなり、街からは音楽が流れなくなり、コンサートもなし…。殺伐とした社会となり、人間らしさとしての生活が危ぶまれることになるのではないのでしょうか。音楽には人の心を癒す力があります。災害等が起こった時には音楽こそが心のよりどころになることがあります。その音楽を創る側と聴く側が共存できる世界こそが、穏やかな生活環境には絶対不可欠なものといえるのではないのでしょうか。

我が国は、経済成長を遂げ、今はゆっくりと坂道を下っている最中だと思います。だからこそ、コンサートや美術館の役割が人々の心の栄養剤となり、真の豊かな社会を創造できるのではないかと思うところです。最後に、意見には個人差があることを改めて申し添えておきます。



